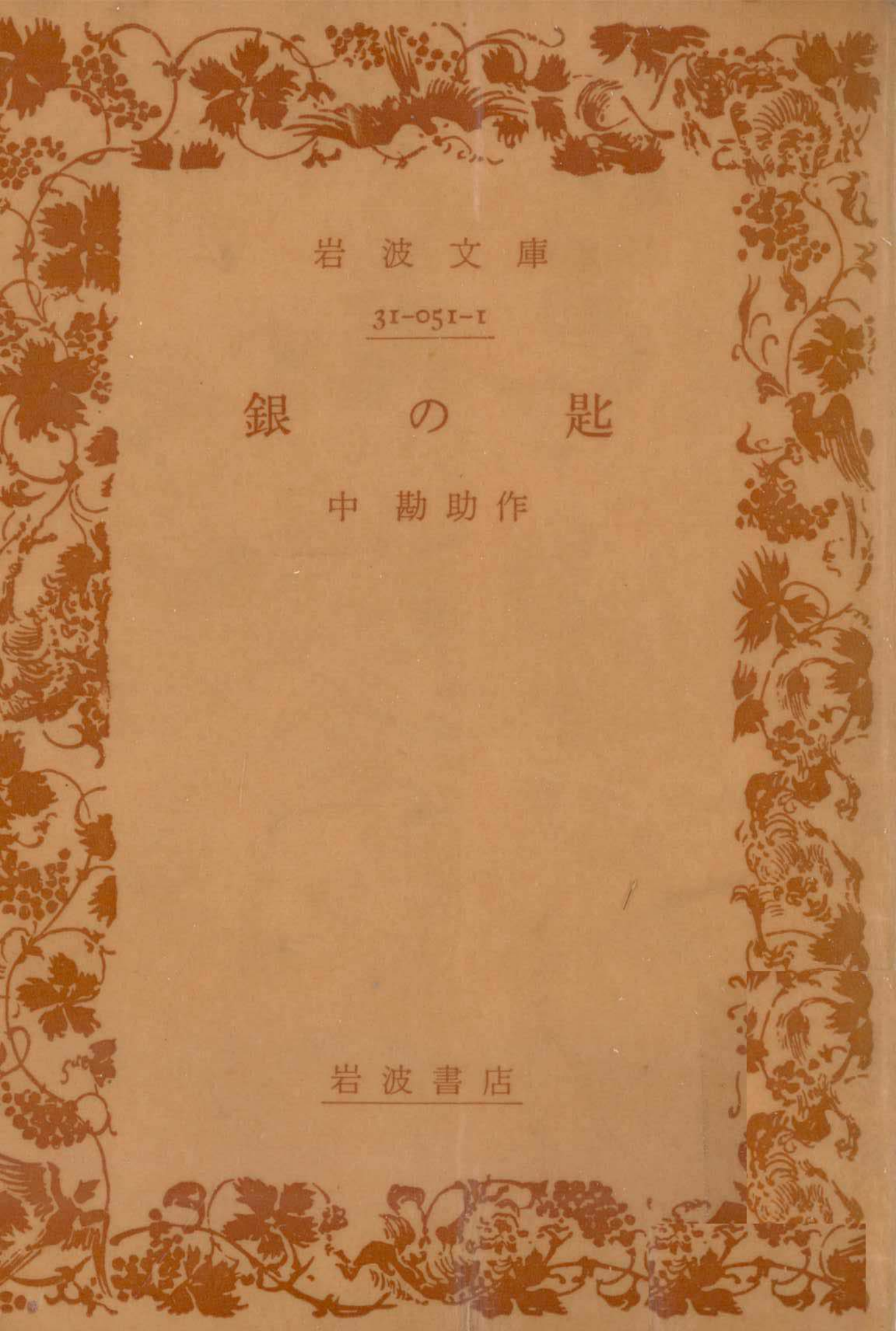




岩波文庫

3I-05I-I

銀の匙

中 勘 助 作

岩波書店

昭和一〇年二月三〇日 第一刷発行
昭和三七〇年二月一六日 第三七刷改版発行 © 銀の匙
昭和五〇年六月二五日 第五二刷発行 ☆☆
定価二〇〇円

作者 中^{なか} 勘^{かん} 助^{すけ}

発行者 東京都千代田区一ツ橋二丁目五番五号 岩波雄二郎

印刷者 東京都青梅市根ヶ布一丁目三八五番地 白井倉之助

発行所 東京都千代田区一ツ橋二丁目五番五号 株式会社 岩波書店
〒一〇一 電話(〇三)二六五一四二一

落丁本・乱丁本はお取替いたします

精興社印刷・桂川製本

岩 波 文 庫

31-051-1

銀 の 匙



岩 波 書 店

銀 の 匙

前篇

一

私の書斎のいろいろながらくた物などいれた本箱の引き出しに昔からひとつの小箱がしまっている。それはコルク質の木で、板の合わせめごとに牡丹ぼたんの花の模様のついた絵紙をはってあるが、もとは舶来こなたばこの粉煙草こなたばこでもはいつてたものらしい。なにもとりたてて美しいのではないけれど、木の色合いがくすんで手ざわりの柔らかいこと、ふたをするとき ばん とふっくらした音のすることなどのために今でもお気にいりの物のひとつになっている。なかには子安貝や、椿つばきの実や、小さいときの遊びもてあそであったこまこました物がいっぱいつめてあるが、そのうちにひとつ珍しい形の銀こさじの小匙こさじのあることをかつて忘れたことはない。それはさしわたし五分ぶぐらいの皿形さらかたの頭にわずかにそりをうった短い柄がついてるので、分ぶあつにできてるために柄の端を指でもってみるとちよいと重いという感じがする。私はおりおり小箱のなかからそれを取りだし丁寧に畳りをぬぐってあかずながめてることがある。私がふとこの小さな匙をみつけたのは今からみればよほどふるい日のことであった。

家にもとからひとつの茶簞笥ちやだんすがある。私はつま立ってやっと手のとどくじぶんからその戸棚とだなをあけたり、引き出しをぬきだしたりして、それぞれの手ごたえやきしる音のちがうのをおもしろがっていた。そこに鼈甲べっこうの引き手のついた小引き出しがふたつ並んでるうち、かたっぽは具合が悪くて子供の力ではなかなかあけられなかったが、それがますます好奇心をうごかして、ある日のことさんざ骨を折ってとうとう無理やりにひきだしてしまった。そこで胸をおどらせながら畳のうえへぶちまけてみたら風鎮ふうちんだの印籠いんろうの根付けだのといっしょにその銀の匙しをみつけたので、わけもなくほしくなりすぐさま母のところへ持って行って

「これをください」

といった。めがねをかけて茶の間に仕事をしてた母はちよいと思いがけない様子をしたが

「だいじにとっておきなさい」

といつになくじきに許しがでたので、うれしくもあり、いささか張り合いぬけのきみでもあった。その引き出しは家が神田かんだからこの山の手へ越してくるときにこわれてあかなくなったままになり、由緒のある銀の匙もいつか母にさえ忘れられてたのである。母は針をはこびながらその由来を語ってくれた。

私の生まれる時には母はことのほかの難産で、そのころ名うてのとりあげばあさんにも見はなされて東桂さんという漢方の先生にきてもらったが、私は東桂さんの煎薬ぐらいではいっかな生まれるけしきがなかったのみか気の短い父がかんしゃくをおこしてかみつくようにいうもので、東桂さんはほとほと当惑して漢方の本をあっちこっち読んできかせては調剤のまちがいのないことを弁じながらひたすら潮時をまっていた。そのようにさんざ母を悩ましたあげくやつのことで生まれたが、そのとき困りはてた東桂さんが指に唾をつけて一枚一枚本をくっては薬箱から薬をしゃくいだす様子は私を育ててくれたひょうきんな伯母さんの真にせまった身ぶりにのこっていつまでも厭かれることのない笑いぐさとなった。

私は元来ひ弱かったうえに生まれるとまもなくたいへんな腫物で、母の形容によれば「松かさのように」頭から顔からいちめんふきでものがしたのでひきつづき東桂さんの世話にならなければならなかった。東桂さんは腫物を内攻させないために毎日まっ黒な煉薬と烏犀角をのませた。そのとき子供の小さな口へ薬をすくい入れるのには普通の匙では具合がわるいので伯母さんがどこからかこんな匙をさがしてきて始終薬を含ませてくれたのだという話をきき、自分ではついぞ知らないことながらなんとなくつかしくてはなしともなくなってしまうた。私はからだじゅうのふきでものをかゆがって夜も昼もおちおち眠らないもので糠袋へ小豆を包んで母と伯母とがかわるがわる瘡蓋のうえをたたいてくれると小鼻をひこつかせてさも気もちよさそうにしたという。

その後ずっと大きくなるまで虚弱のため神経過敏で、そのうえ三日にあげず頭痛に悩まされるのを、家の者は糠袋ぬかぶくろでたたいたせいで脳を悪くしたのだ。といって来る人ごとに吹聴ふいちょうした。そのように母に苦勞をかけて生まれた子は母の産後のひだちのよくないためや手の足りないために、ときどき乳をのませるときのほかはちようどそのころ家の厄介やっかいになってた伯母おばの手ひとつで育てられることになった。

三

伯母さんのつれあいは惣右衛門そうえもんさんといって国では小身ながら侍であつたけれど、夫婦そろつて人のいい働きのない人たちだったので御維新の際にはひどく零落してしまい、ひきつづき明治何年とかのコレラのはやった時に惣右衛門さんが死んでからはいよいよ家がもちきれなくなつてとうとう私のとこの厄介やっかいになることになつたのだそうだ。国では伯母さん夫婦の人のいいのにつけこんで困つた者はもとより、困りもしない者までが困つた困つたといつて金を借りにくると自分たちの食べる物に事をかいてまでも貸してやるので、さもなくしてさえ貧乏な家はまたたくうちに身代かぎり同然になつてしまつたが、そうなれば借りたやつらは足ぶみもしずに陰で

「あんまり人がよすぎるで」

などとあざ笑つていた。二人はよくよく困れば心あたりの者へ返金の催促もしないではなかつた

けれど、さきがすこし哀れなことでもいいだせばほろほろもらい泣きして帰ってきて

「気の毒な 気の毒な」

といっていた。

また伯母^{おば}さん夫婦は大の迷信家で、いつぞやなどは 白ねずみは大黒様のお使いだ といつて、どこからかひとつがい買ってきたのを お福様 お福様 と後生大事に育ててたが、ねずみ算でふえるやつがしまいにはぞろぞろと家^{うち}じゅうはいまわるのをおめでたがって、なにか事のある日には赤飯をたいたり一升^{いっしょう}杓^{すく}に煎^いり豆^{まめ}を盛^もったりしてお供えした。そんなふうでわずかばかりの金^{かね}は人に借り倒^たされ、米櫃^{こめびつ}の米はお福様に食^くい倒^たされて、ほんの着^きのみ着^きのままの姿で、そのじぶん殿様のお供でこちらに引越^ひしてた私の家^{うち}をたよりにはるばる国もとから出てきたのだそうだが、その後まもなく惣右衛門^{そうえもん}さんがコレラでなくなったため伯母さんはまったく身ひとつの寡婦^{こらふ}になってしまった。伯母さんはその時の話をして それは異国のキシタンが日本人を殺してしまおうと思^{おも}って悪い狐^{きつね}を流^{なが}してよこしたからコロリがはやったので、一コロリ三コロリと二へんの熱でまっ黒^{くろ}になつて病人に水ものませずに殺^{ころ}してしまふ。病人はみんな腹わたが焼^やけて死ぬのだ といつた。

伯母さんは私を育てるのがこの世に生きてる唯一の楽しみであった。それは、家はなし、子は

なし、年はとってるし、なんの楽しみもなかったせいもあるが、そのほかにもうひとつ私を迷信的にかわいがる不思議なわけがあった。というのは、今もし生きていればひとつちがいであるはずの兄が生まれるとまもなく「驚風^{*}」でなくなったのを、伯母^{おば}さんは自分の子が死んでゆくように嘆いて

「生まれかえってきとくれよ、生まれかえってきとくれよ」

といっておいおいと泣いた。そうしたらその翌年私が生まれたもので、仏様のおかげで先^{せん}の子が生まれかえってきたと思ひこんで無上に私をだいじにしたのだそうである。たとえこのきたないできものだらけの子でもが、たよりない伯母さんの頼みをわすれずに極樂の蓮^{はちす}の家をふりすててきたものと思えばどんなにかうれしくいしかったであろう。それゆえ私が四つ五つになってから、伯母さんは毎朝仏様へお供物をあげる時に——それは信心深い伯母さんの幸福な役目であった。——おりおりお仏壇のまえへつれて行ってまだいろはのいの字も読めない子供に兄の戒名、伯母さんの考えによればすなわち私が極樂にいた時の名まえであるところの 一喚^{いつかん}即^{そく}応^{おう}童子^{どうじ} といふのを空^{そら}に覚えさせた。

四

私は家のなかとはかく一足でも外へでるときには必ず伯母さんの背中にかじりついてたが、

伯母^{おば}さんのほうでも腰が痛い腕がしびれるのとこぼしながらやっぱしはなすのがいやだったの
 であろう。五つぐらいまではほとんど土のうえへおりたことがないくらいで、帯を結びなおすと
 きやなにかにどうかして背中からおろされるとなんだか地べたがぐらぐらするようないきがして一
 所懸命袂^{たもと}のさきにへばりついていなければならなかった。そのころ私は浅葱^{あさぎ}のしごきを胸高にし
 め、小さな鈴と成田山^{なりたさん}のお守りをさげていた。それは伯母さんのくふうで、お守りはもとよりけ
 がのないため、溝^{どぶ}や川へ落ちないため、鈴は伯母さんが目がかすんで遠くが見えないので、もし
 やはぐれたときにその音をききつけて捜しにこようというのである。しかし年が年じゅう背中か
 らおりたことのない子には鈴もお守りも実はまったく無用のものであった。私は虚弱のため知恵
 のつくのが遅れ、かつはなはだしく憂鬱^{ゆううつ}になって、伯母さん以外の者には笑顔^{えがお}を見せることはほ
 とんどなく、また自分から口をきくことはおろか家の者になにかいわれてもろくに返事もせず、
 よっぱどきげんのいい時ですらやっと黙ってうなずくぐらいのもので、いくじなしの人みしりば
 かりして、知らない人の顔さえみれば背中に顔をかくして泣きだすのが常であった。私がやせほ
 うけて肋骨^{ろつこつ}があらわれ、頭ばかり大きくて目がひっこんでたため家の者はみんな章魚坊主^{たこぼうず} 章
 魚坊主^{たこぼうず} といったが、自分ではわが名の□ぼうをなまって □ぽん と名のついていた。

五

私の生まれたのは神田のなかの神田ともいうべく、火事やけんかや酔っぱらいや泥坊どろぼうの絶えまのないところであった。病弱な頭に影を残した近所の家といえむこの米屋、駄菓子屋だかしやをはじめ、豆腐屋、湯屋、材木屋などいうたちの家ばかりで、筋向こうのお医者様の黒塀くろべいと殿様のところの——私の家はその邸内にあった。——門構えとがひとときわ目だった。

天気の良い日には伯母おばさんはアラビアンナイトの化けものみたいに背中にくっついてる私を背負いだして年よりの足のつづくかぎり氣にいりそうなどころをつれてあるく。じき裏の路地の奥に蓬萊豆ほうらいまめをこしらえる家があつて倶梨迦羅紋くりからもんの男たちが犢鼻褌ふんどしひとつの向こう鉢巻はちまきで唄うたをうたいながら豆を煎いってたが、そこは鬼みたいな男たちがこわいのと、がらがらいう音が頭の心しんへひびくのとできらいであった。私はもしそうしたいやなどころへつれて行かれればじきにべそをかいてからだをねじくる。そして行きたいほうへ黙もくって指さしをする。そうすると伯母さんはよく化けものの氣もちをのみこんで間違まちがひなく思うほうへつれていってくれた。

いちばん好きなどころは今も神田川のふちにある和泉町いずみちょうのお稲荷いなりさんであった。朝早くなど人のいないときには川へ石を投げたり、大きな木の実のような鈴を鳴らしたりしてよく遊んだ。伯母さんは私を塵ちりのなさそうな石、またはお宮の段々のうえなどにおろしてお詣まいりをする。穴あき

銭がからからとおちてゆくのがおもしろい。どこの神様仏様へいってもなにより先に この子からだが丈夫になりますように といってお願ひするのであった。

ある日のこと私が後ろから帯をつかまえられながら木柵もくさくにつかまって川のほうを見てたら水のうえを白い鳥が行きつもとどりつ魚を漁あきっていた。その長い柔らかそうな翼をたおたおと羽ばたいてしずかに飛びまわる姿はともすれば苦痛をおぼえる病弱な子供にとってまことに格好な見ものであった。それで私はいつにない上きげんであったが、おりあしくそこへ玉子と麦粉菓子むぎこがしを背負った女のあきんどが休みにきたものでれいのおりすぐに伯母さんの背中へくつついた。女は荷をおろしかぶってた手ぬぐいをとって襟えりなどふきながらなんのかのと上手じょうずに愛想を言い言いさしもの弱虫を手なずけてしまって、そろそろ背中から降りかけるじぶんにはもう麦粉菓子の箱をあけて私を釣つりにかかった。女は小判かおりなりの薫かおりのたかい麦粉菓子を取りだして指のさきにくるくるとまわしながら

「坊っちゃん 坊っちゃん」

と手にもたせてくれたので伯母さんはしかたなしにそれを買った。今でさえ、あの渋紙かじばりの籠かごを大儀おごそうに肩からはずしてなかば糲もみがらにうずまってる白い、うず赤い卵や、ぷんとおいのあがる麦粉菓子などを見せられるとありったけ買ってやりたい気がしてならない。お稲荷いなりさんはその後立派になり、にぎやかにもなったが、その時の柳ばかりは今も涼しくなびいている。

六

お稲荷さんへ行かない日にはきたない財布にお賽銭と木戸銭用の小銭を入れて牢屋の原へつれてゆく。それは有名な伝馬町の牢屋のあとで、いろんな見世物がしょっちゅうかかっていた。また小あきんどが露店をならべて蝶螺の壺焼きや、はじけ豆や、みかん水や、季節になれば唐もろこし、焼き栗、椎の実などもうる。紅白だんだらの幕をはった見世物小屋の木戸に拍子木と下足札をひかえてあぐらをかいてる男は手を口へあてて　ほうばん　ほうばん　と呼びたてる。鎖につないだ山犬の鼻さきへ鶏をつきつけて悲鳴をあげさせるのもある。お皿のある怪しげな河童が水だまりのなかでぼちゃぼちゃやるのもある。でろれん祭文は貝をぶうぶう吹いて金の棒みたいなものをきんきん鳴らしては　でろれん　でろれん　というのでさっぱりおもしろくなかったけれど伯母さんは自分が好きだものでたびたびつれていった。あるとき珍しく人形芝居がかかったことがあって、桜がいちめんに咲いた草山に絵草紙でみるお姫様みたいな人が鼓をもつて踊るところの絵看板があがっていた。私は大喜びでそこへはいったが、たちまちかちゃんかちゃんと恐ろしい音がして顔も手足もまっかなやつがねじくれた襷をかけて飛び出したのでびっくりしてわあわあ泣きだしてしまった。あとできけばそれは千本桜の狐忠信だったのだそうだ。

氣にいった見世物のひとつは駝鳥と人間の相撲であった。ねじ鉢巻の男が撃剣のお胴をつけて

鳥が戦いをいどむときのようにひょんひょんはねながらかかってゆくと駝鳥^{だちよう}が腹をたててぱつと蹴^けとばすのである。ある時は駝鳥のほうが首ねっこを押えつけられて負けになり、ある時は男のほうが蹴たてられて まいった まいった といって逃げだした。そのあいだに交代の男がかたすみで弁当をつかってたのを相手をなくしてぶらぶらしてたもう一羽の駝鳥がこっそり寄ってっていきなり弁当をのもうとしたもので男はあわてて飛びのいた。その様子がおかしかったの見物人はどっと笑った。伯母^{おば}さんは

「駝鳥がひもじがっとなるにござんももらえんで気の毒な」といって涙をこぼした。

七

私のような者が神田のまんなかに生まれたのは河童^{かわづむ}が砂漠^{さばく}で孵^{かえ}ったよりも不都合なことであった。近所の子はいずれも神田っ子の卵の腕白^{うでしろ}でこんないくじなしは相手にしてくれないばかりかすきさえあれば辛いめをみせる。なかでもむこうの足袋屋^{たびや}のむすこなどは伯母さんがぼんやりしてると後ろからだしぬけに人の横ずっぽうをはつつけては逃げて行き行きたもので私はひどくおじけてとかくひっこみがちになってしまった。家^{うち}にいるときには往来へむいた高窓^{たうまど}にのせ、格子^{こし}子につかまらして、伯母さんが後ろからおさえながら馬や車や目にふれるものの名など教えて遊